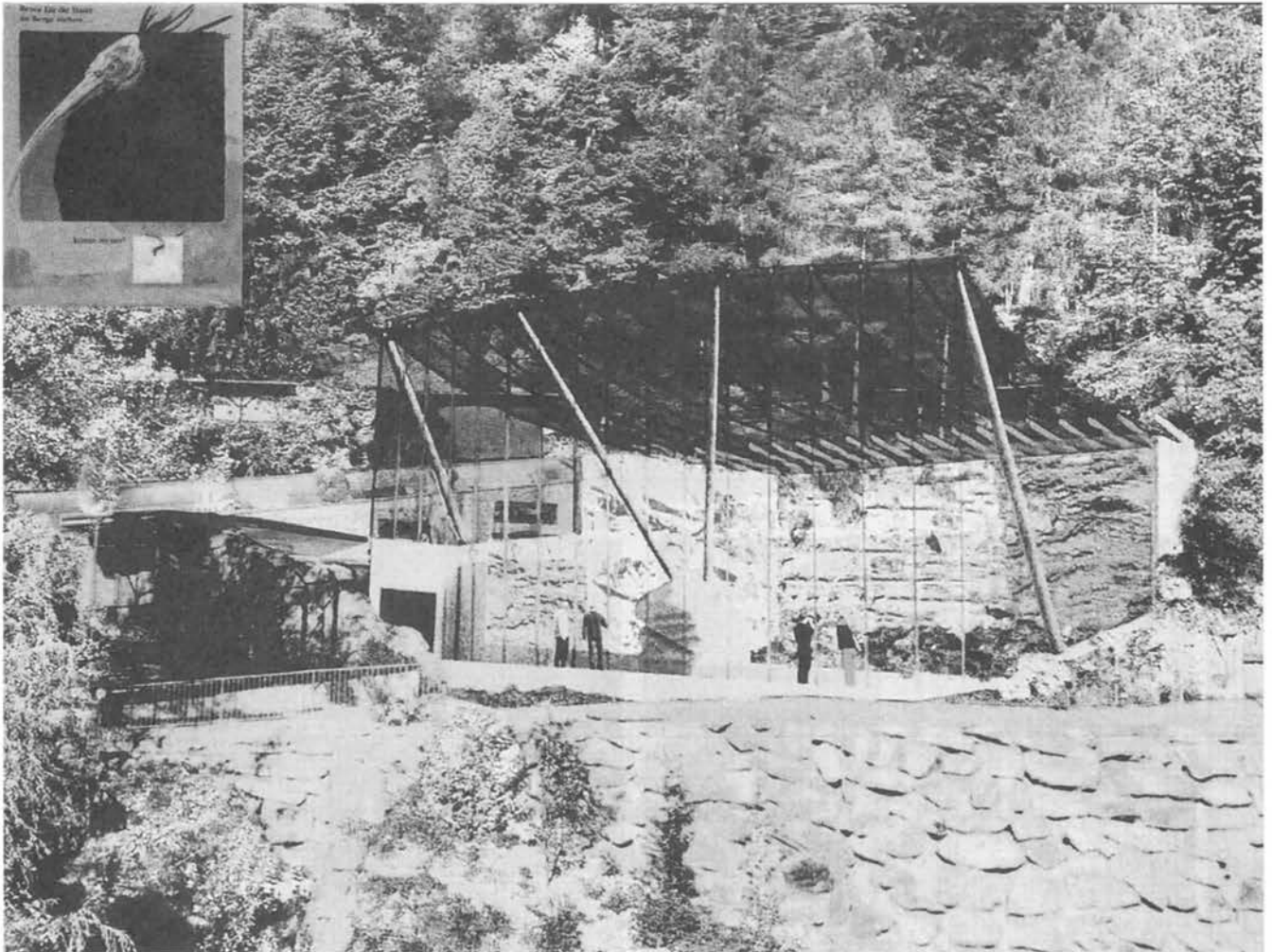


山と博物館

第48巻 第2号 2003年2月25日

市立大町山岳博物館



ホオアカトキ（左上）と完成した飼育舎

アルペン動物園創立四〇周年

大町山岳博物館

オーストリア、チロル州の州都インスブルック市にある「アルペン動物園」は二〇〇二年（平成十四年）創立四〇周年を迎えた。これを祝う式典が九月二二日に挙行された。

大町市からは腰原大町市長をはじめ柳澤山岳博物館長らが式典に参列した。アルペン動物園の多大な功績に敬意を表するとともに、これからの発展を祈念する。インスブルック市と大町市と、アルペン動物園と大町山岳博物館の四者が友好提携したのは一九八五年（昭和六〇年）である。アルプスマーモットとニホンカモシカの動物交換を契機に恒久的な友好提携協定を締結した。協定書には「文化をはじめさまざまな分野において、密接な交流をはかり、それを通じて相互信頼と友好を深め、将来にわたって、両市の繁栄と幸福のために貢献する」と記してある。

今回の記念式典は四〇周年を祝う行事でもあったが、ホオアカトキの飼育舎の完成式典でもあった。ホオアカトキは全長約七〇センチメートル、体重約一・三キログラムのトキ科の鳥で、崖や岩場に生息している。ワシントン条約に該当し絶滅危惧種でもある。アルペン動物園ではすでに数多くのホオアカトキの繁殖に成功し、野生復帰にも貢献している。

オーストリア・チロル地方の 動物園と博物館を訪ねて

宮野典夫

アルペン動物園創立四〇周年記念式典への参列にむかえ、インスブルック市郊外のトリンス村で進めている山岳に関するイベントと博物館設立の準備について情報交換をする機会が得られたので、両園館の取組みを紹介する。ただし、トリンス村での博物館はまだ構想段階で、存在はしていない。

アルペン動物園のコンセプト

一九六二年（昭和三七）年に開園した動物園で、飼育している動物は一〇〇種を超えている。また、この動物園で扱う動物は現在ヨーロッパアルプスに生息しているか、あるいは過去に生息していた種に限られている。

動物園での飼育展示だけではなく、教育普及活動や野生動物の保護保全にも力を注いでいる。傷病鳥獣の救護だけではなく、稀少な野生動物たちを動物園で増殖し、野生復帰をする事業も展開している。

アルペン動物園の飼育舎

歴史の古い動物園なので飼育施設は新旧さまざまで、計画的に改築と新築を進めている。また、山の斜面にあるため、通路は坂道であり、飼育舎建設のためのスペースも平らな部分が少ないので、建物の配置と観覧者の導線にはかなりの苦労をされているようである。

創立四〇周年のイベントのひとつとして園内の通路には建設当時の写真が展示しており、

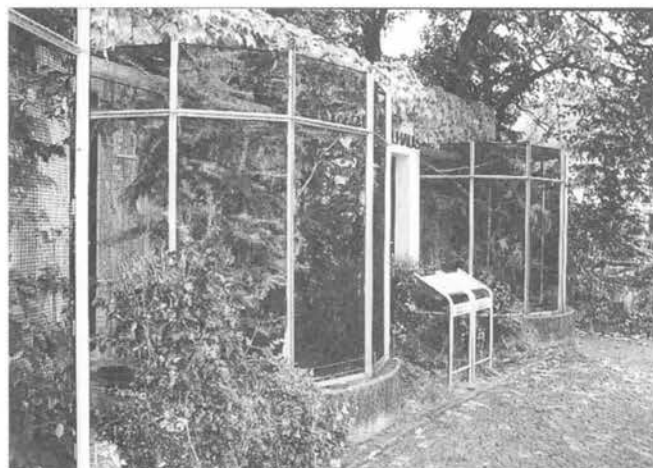


建設当時のイヌワシ舎の写真

今との違いがわかるようになっていた。

最も新しい飼育舎はホオアカトキの飼育舎で、約一五メートル×一〇メートル、高さ約八メートルのフライイングゲージで、背面は人工壁となっていて、生息現地の環境をできるだけ多く取り入れた施設となっている。建築材質もステンレス製の金網を使用し、糞による腐食の防止など管理面でも考慮がされている。

友好提携締結の二年後にオープンした連棟式の小鳥舎は無機質なコンクリート造りの建物であったが、時間の経過とともに外側も内側も植物が茂り、豊かな緑の中で小鳥たちが



木々でおおわれた連棟式の小鳥舎



ホオアカトキの飼育舎内部（奥の壁で休息中）

木々でおおわれた連棟式の小鳥舎
動物園という名称ではあるが、園内には水族館がある。淡水性の魚が大きな水槽の中を泳ぎ回っている。また、小さな水生昆虫やカエルなども水生植物とともにわかりやすく展示してある。

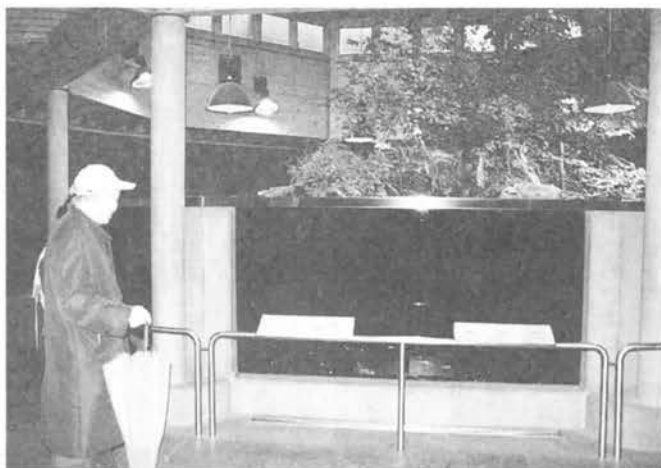
枝から枝へと飛びまわっている。
動物園内の整備には立ち木をそのまま残してパドック内に取り入れたり、歩道の脇に配置したりしている。また、灌木や草の緑がとても多く、きれいに手入れがされていて動物にとっても、見学する人に対しても良い環境になっている。



石と木を活用した歩道



水性動物の環境もわかる水槽



水槽の上部がオープンとなっている水族館

動物園でのユニークな活動
アルペン動物園の入り口はチケット売り場があつて、その奥が売店という構造になっていたが、今は売店のレジがチケット売り場になっている。動物園を見学するにはどうしても売店を通ることになる。その売店にはたくさんグッズが並べられている。この収益が動物園の経営を支えるひとつになっている。



改築計画が進んでいるヒグマ舎

いま計画中の施設はヒグマの飼育舎だそう。現在の施設はコンクリート壁で囲まれ、鉄平石で敷き詰められ、放飼場の中央に大木をいくつか重ねて作ったシエルトや遊び場がある。新しい施設は飼育担当や技師とのプロジェクトチームによる設計の段階であるとのこと。完成のあかつきにはどのような飼育施設になっているのか楽しみである。

園内には動物の解説看板とは別の看板がそれと同じくらいある。この看板は動物に対するサポートシステムのひとつで、企業や個人がその動物のために援助し、その証に動物の飼育舎の前に企業名や個人名が掲げられ広告の役目をしている。アルペン動物園ではイス

入り口の横にはワイヤーブルク宮殿があり、動物園の事務所はこの宮殿内にあつて、記念式典もこの宮殿でとりおこなわれた。また、レストランやカルチャーホールもあり、市民の憩いの場になっているようだ。売店の上には軽食コーナーやドリンクコーナーもありアルコール類も販売している。アルペン動物園での人気行事はこれらの飲食施設を活用したパーティーの開催だそうである。特に子どもの誕生日の記念にパーティーを申し込む希望者が多いとのこと。



ワイヤーブルク宮殿

国際文学交流研究所の活動
ウィーンにある国際文学交流研究所では「山岳と山麓の人たち」をテーマにしたシンポジウムや映画上映会を毎年開催している。二〇〇一年（平成十三年）オーストリアのラムザウ村で開催されたシンポジウムでは日本の山の紹介と山名の由来について発表があった。これが機会となり大町山岳博物館との交流を希望する連絡がきた。
インスブルック滞在中に「山岳と山麓の人たち」をテーマにした映画上映会がインスブルック郊外のトリンス村で開催されていたので参加してきた。

ワシ舎の前にイスワシをトレードマークにしている地元の新開社がスポンサーとなり、サポートのオーナーとなっている。
アルペン動物園には友の会があるが、教育普及活動の面だけでなく、動物園を資金面でも支援する組織で、個人はもちろん銀行や会社といった民間企業の加入もあり、動物園にとって欠かせない組織となっている。



ポートスポンサーの看板

山岳に関する博物館構想

トリンズ村では、国際文学交流研究所と共同で山に関する博物館の設立をめざしている。世界中の山に関する博物館との情報交換も視野にしている。

博物館構想の話のを伺えたのは国際文学交流研究所に携わるウィーン大学の教授とトリンズ村の村長である。山と人との関わりを重視した内容の博物館をトリンズに設立したいと希望し、今その準備を進めているとのことである。ただし、山との関わりといってもスポーツ登山ではなく、山と結びついた仕事や生活をしている人と山をテーマに展開していきたいとのこと。

建物は新たに建設するのではなく、取り壊す予定になっている農家を改造して博物館に



トリンズ村へ向う途中の山村

することを考えている。候補となっている建物には今もお住まいの方がいるが、古い建物が徐々に解体されていく状況が村長としてもしのびなく、この家の間取りをあまり変えず博物館として残したい考えである。

展示については実物資料を精力的に集めたり創作するのではなく、インターネットなどを活用し、情報を集めたり発信する基地にする構想を持っていた。

チロル地方の農家

博物館の候補となっている農家を見せていただいた。現在お住まいの方が歓迎してくださり、ご案内をいただいた居間には壁に埋め込まれた昔ながらの大きなストーブがあり、ほんのりとしたやわらかいぬくもりが伝わってきた。キッチンの隣は牛舎になっていたが、



博物館の候補地となっている農家

今はもう牛の飼育はしていなかった。しかし、今にも牛が顔を出すのではないか、アルプスの少女が姿を現すのではないかと思えるほどの雰囲気がある。

山岳に関する映画祭

村のカルチャーセンターで開催された映画祭に参加した。会場の入り口カウンタには若者がいて笑顔をふりまいてくれた。農業を専攻している高校生がドリンクサービスをして自分たちの活動の資金にしているとのこと。会場は三〇〇人ほどが収容できるホールで、おじいさんやおばあさんも椅子に座って開演を待っていた。会場後方のスペースでは、テーブルの上にクッキーやドライフラワーなどがあり、村の人たちがみんなで楽しむ姿がみられた。

映画の途中で退場したが、外に出た時に民俗衣装を着た若い女性数名がカルチャーセンターに向かって行った。こんなところからもこの映画祭を盛り上げようとする村の人たちの熱意が感じられる。

村長と教授には大町山岳博物館の基本理念や現在の展示、教育普及活動、調査研究の概要をお話し理解していただいた。トリンズ村で考えている山に関する博物館と大町山岳博物館がどのような関係を持ったらいのかを考える出発点となったが、情報の交換はお互いに進める必要があると感じる。

「映画祭はこれからも引き続き開催するので、おおいに日本から参加をしてください」とのメッセージがあった。

(大町山岳博物館副館長)

お知らせ

「ニホンカモシカの赤ちゃんの名前が『さくら』に決まりました」

大町山岳博物館付属園で昨年(平成十四)五月十四日に生まれ、人工哺育で育ったニホンカモシカの赤ちゃんの名前を募集したところ、先月二〇日の締め切りまでに三二二名のみなさんから二九種類の名前をご応募いただきました。その中から選考した結果、ニホンカモシカの赤ちゃんの名前は「さくら」に決定しました。名付け親となったみなさんは次の方々です。(五十音順)

荒井啓子さん (長野市)
新沢大司さん (白馬村)
一志陽子さん (大町市)
大河内実冬さん (長門町)
傘木知子さん (大町市)
川原恵美子さん (大町市)
北村一郎さん (長野市)
種山晴香さん (大町市)
長谷川たづ子さん (岡谷市)
原田真由さん (大町市)
前澤幸子さん (南木曾町)
水谷しま子さん (愛知県一宮市)
宮澤喜代美さん (大町市)
宮澤ふみ子さん (大町市)
横澤むつみさん (小谷村)

ご応募いただきましたすべてのみなさんに感謝申し上げます。どうもありがとうございました。(大町山岳博物館)

山と博物館第48巻第2号

発行 二〇〇三年二月二十五日発行
〒388長野県大町市大字大町八〇五六一
市立大町山岳博物館

TEL 026-122-1021
FAX 026-122-1133

印刷 大糸タイムス(株)
定価 年額 一、五〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号 〇〇五四〇一七 一三九三